量詞の唐代以降における用法の変遷について

――『大唐三蔵取経詩話』と『老乞大』『朴通事』から――

橋本 永貢子

(2010 年 6 月 30 日受理)

The Evolution of Classifiers from Tang to Qing Dynasty

—From the Uses of "DaTang sanzang qujing shihua" and "Laoqida" "Piaotongshi" —

Ekuko Hashimoto

1 はじめに

量詞は、名詞あるいは動詞から文法化したものであるが、文法化のどの段階で「成立」と考えるかにより、その時期についての見解は異なる[1]。吴福祥 2007 は、こうした事情を踏まえ、"文本频率""句法行为""语义泛化程度"の三つのパラメーターから名量詞の文法化の程度を判定している[2]。パラメーターの設定は論点を明確にするという点で大変有効であり、量詞の文法化研究の一つのあり方を示したといえるが、次に問題となるのは、どのようなパラメーターを設定するかである。吴福祥 2007 では"文本频率"として数詞とともに量詞が現れる形式と現れない形式の割合について考察しているが、ある事物に言及する時に数量を伴う表現を採るか否かについても、唐・宋代と現代の用法とはなお隔たりがある。

(1) 法师曰："借刀，我自修事"长者取刀度与法师。（大唐・第十七）

下線部は、現代の普通話でならば"借把刀""取一把刀"など量詞が付加されるであろうが、"刀"は裸のまま動詞の目的語となっている。唐・宋代の文献では、量詞を伴わず数

---

1 大きく分けて、向熹 1993 は漢代、太田 1958、王力 1989、刘世儒 1965 は魏晋南北朝期、贝罗贝 1998、石・李 2001 は唐代以降としている。

2 吴福祥 2007 では、「魏晋南北朝期における量詞の文法化の程度はまだ低く、量詞というカテゴリーが完全に成熟したのは唐代以降」と結論付けている。

詞が直接名詞に付加される形式が少なくなかったが、加えて(1)のような、そもそも数量に言及しない形式も現れており、現代語に比べ全体的に量詞の出現頻度が低くなっている。このことは、唐・宋代以降、量詞に更なる用法の変化があったことを示しているが、それは一体どのような変化なのであろうか？また用法の変化が量詞の更なる文法化であるなら、どのようなパラメーターを設定しうるであろうか？

こうした観点から以下では、『大唐三蔵取経詩話』と『老乞大』『朴通事』の用例から、量詞の用法が変化したことについて考察し、文脈あるいは談話で一定の役割を果たすようになっていったことを明らかにする。

2 『大唐三蔵取経詩話』の用例から

2．1 『大唐三蔵取経詩話』における数量表現について

『大唐三蔵取経詩話』は、三蔵法師・玄奘が天竺へ経典を取りに行ったことを題材とした通俗文学であり、『西遊記』の元になった小説の一つである。その成立は、一般に南宋とされているが、言語的特徴は、唐五代の仏典や敦煌変文と重なるところが多いともいう[3]。数量表現についていえば、量詞を伴うもの伴わないもの、数詞あるいは数詞＋量詞が名詞に前置されるもの後置されるものが混在し、まさに古い形式から新しい形式への過渡期の様相を呈している。

(2) 迤逦登程，遇一座山，名号“香山”，是千手千眼菩萨之地，又是文殊菩萨修行之所。（第四）

(3) 举头见一寺额，号“香山之寺”。（第四）

(4) 猴行者当下怒发，却将主人家新妇，(中略）被猴行者作法，化此新妇作一束青草，放在驴子口伴。（第五）

(5) 猴行者曰：“驴子口边青草一束，便是你家新妇。”（第五）

(6) 逡巡投一国，入其殿宇，只见三岁孩儿无千无万。（第九）

(7) 猴行者曰：“你肚中无千无万个老猕猴，今日吐至来日，今月吐至后月，今年吐至来年，今生吐至来生，也不尽。”（第六）

(2)(3)は、どちらも山或いはお寺の額が三蔵法師一行の視界に入り、それぞれの名前を述べるという文であるが、(2)は量詞を伴い、(3)は量詞を伴っていない。(4)(5)は数量詞“一束”が名詞“青草”の前にも後ろにも置かれる例である。(6)(7)は“无千无万”という数詞が名詞に後置されている例と量詞を伴って前置されている例である。

量詞の有無、前置後置によるこれら４つのタイプは、(6)のような［名詞＋数詞］タイプが５例と少数であることを除けば、極端な偏りはないといってよく、また機能的にも明確

[3] 李时人・蔡镜浩 1997、pp. 58-85 参照。

な使い分けがあるようには思えない。この作品が量詞の古い形から新しい形の移行期にあったということを考えれば、形式と意味が一対一対応ではないのはむしろ当然のこととも言えよう[4]。

しかし詳細に見ていくと、ある形式が現れない、あるいはある形式が現れやすいコンテクストのあることが分かる。そこで以下では、量詞の出現頻度が高くなっていく過程を明らかにするという目的に従い、量詞を伴うタイプと伴わないタイプに大別し、それぞれがどのようなコンテクストに現れやすいかをみていく。

2．2　量詞の付加とコンテクスト

2.2.1　数量を伴う名詞句が列記される場合

まず、コンテクストの違いが比較的分かりやすい場合から見ていこう。

(8) 天王赐得隐形帽一事，金镮锡杖一条，钵盂一只。（第三）

(9) 女王遂取夜明珠五颗、白马一疋，赠与和尚前去使用。（第十）

(8)　(9)は、いずれも下賜されたものを列挙する文である。これらはいわゆるリスト文といわれ、現代語でもなお“清单”では量詞が名詞に後置されている。量詞の位置はさておき、そもそも個体量詞は、連続する事物の数量をいう場合の集合量詞と異なり、離散的事物の数量をいう場合に必須のものではない。中国語でも先秦期以前には用いられなかったが、集合量詞の「類推」から用いられるようになったという[5]。離散的事物の数量をいう場合にも量詞を付加させたいという欲求は、おそらく量詞を付加せざるを得ない連続的事物とともに列記されるリスト文においてこそ強かったと推測される。そして現在においてはもちろん量詞は不可欠であるから、唐宋代の作品におけるリスト文で量詞を付加する形式が採られるのはごく自然のことである。

一方、量詞を伴わず数詞が直接名詞に連なる形式が列挙されるものは次のように用いられている。

(10) 此桃种一根，千年始生，三千年方见一花，万年结一子，子万年始熟。（第十一）

(11) 七人上舡，望正西乘空上仙去也。九龙兴雾，十凤来迎，千鹤万祥，光明闪烁。（第十七）

(10)は西王母池の“蟠桃”について、その生育過程を説明したものであり、根、花、実

---

[4] また『大唐三蔵取経詩話』における”人”という一語彙の文法的ふるまいからも、その混在の様子がうかがえる。
①僧行六人，当日起行。（第二）
②午时采莲舡至，亦有金莲花座，五色祥云，十二人玉音童子，香花幡幢，七宝璎珞，未时迎汝等七人归天。（第十六）
③痴那曰：“夜半见有一人，称是甘露王如来，手执药器，来与我延接舌根。”（第十七）
例①②の“人”は、名詞に対し後置あるいは前置の違いはあるが、量詞と解釈されるが、③の“人”は名詞と解釈すべきであろう。

[5] 太田 1958 参照。

は不特定であり、現実世界に存在するものを指しているわけではない。 (11)は三蔵法師一行が経典を得て、天宮から迎えが来た時の様子を述べたものである。“九龙”“十凤”“千鹤”はこの場面に実際に現れたものであるが、それらは“光明”と同様、この場面を構成する一部分として描かれているのであって、事物の数量を示すことに主眼があるわけではない。

2.2.2 変化を表す場合

次に気が付くのは、“猴行者”が妖術によって姿を変えさせられたものに、量詞が伴うことである。

(12) 被猴行者将金镮杖变作一个夜叉，头点天，脚踏地，手把降魔杵，身如蓝靛青，发似硃沙，口吐百丈火光。（第六）

(13) 被行者手中旋数下，孩儿化成一枝乳枣，当时吞入口中。（第十一）

(14) 被猴行者隐形帽化作遮天阵，钵盂盛却万里之水，金镮锡杖化作一条铁龙。（第七）

これらの場面では、あるものが姿を変えられ、そして具体的な形を持って現れている。同じく姿を変えられたものであっても (14)の“遮天阵”に数量詞が付加されていないのは、天を遮るほどの陣立てが形を認識するには大きすぎるからであろうか。また次の例では、同じく僧がロバに姿を変えられたことを述べるものであるが、一方は数量詞を伴い、一方は伴わない。

(15) 然小行者被他作法，变作一个驴儿，吊在厅前。（第五）

(16) 主人曰：“今早有小行者到此，被我变作驴儿，见在此中。”（第五）

(15)はまさに変化が起こったことを述べるものであり、 (16)は事後に説明しているものである。両者の相違は臨場感、あるいは書き手・話し手と現象との距離のとり方にあり、その相違が量詞の有無に関わっていると考えられる。

(17) 主人噀水一口，驴子便成行者。猴行者噀水一口，青草化成新妇。（第五）

(17)では、“猴行者”と“主人”が和解し、それぞれが姿を変えたものを元の姿に戻すという場面である。 (15) (16)と同じく変化を表す文脈ではあるが、どのように変化するかというより、元に戻ったということが重要であり、こうした談話レベルでの際立ちの弱さが数量詞を伴っていないことの理由としてあげられよう[6]。

2.2.3 話し手・書き手の関心の強さ

さて、量詞を付加するか否かという対立に話を戻すと、次の用例に着目される。

(18) 猴行者即将金镮杖向盘石上敲三下，乃见一个孩儿，面带青色，爪似鹰鹞，开口露牙，从池中出。行者问：‘汝年几多？”孩曰：“三千岁。”行者曰：“我不用你。”

[6] 古川 1997 は、現代語における量詞の付加について、目立つものを目立つ形式で表す、としている。

又敲五下，见一孩儿，面如满月，身挂绣缨。行者曰：“汝年多少？”答曰：“五千岁。”行者曰：“不用你。”又敲数下，偶然一孩儿出来。问曰：“你年多少？”答曰：“七千岁。”（第十一）

これは、変化というより出現というべき場面である。ここで現れる三人の子供はそれぞれ異なる子供であるが、一番目の子供は“一个孩儿”と量詞を付加し、あとの二人は“一孩儿”と量詞を付加せず示している。いずれも「一人の子供」が「大きな岩を叩くと池の中から現れた」という状況であるから、量詞の有無が何かの相違を反映しているとするなら、それは書き手の態度や主観的な認識だと考えられる。さらに、“一个孩儿／一孩儿”が現れる文脈を見ていくと一番目の子供については、“面带青色，爪似鹰鹞，开口露牙，从池中出。”とその様子が詳細に描かれているが、二番目の子供は“面如满月，身挂绣缨。”、三番目の子供にいたってはその様子についての説明は無い。同様な状況が度重なれば、自ずとその描写は簡略になっていくであろうが、翻って描写の多寡は話し手・書き手の対象に対する関心の程度、正確にはどの程度詳細に提示するべきかという話し手・書き手の意識・判断を反映すると考えられる[7]。次の例でも、量詞の有無の理由として書き手の事物に対する認識の違いを指摘することができよう。

2．3　現実世界及び談話での際立ち

さて、2.1 で述べたように、『大唐三蔵取経詩話』は、数量表現の古い形から新しい形の移行期にあって両者が混在している文献であるため、数量を伴うすべての名詞句が統一的なルールに当てはまるというわけではない。ただ、当時量詞の付加が強制的ではなかったにもかかわらずなお量詞を付加することには、やはり何らかの動機があったと考えられる。まず挙げられるのは、量詞が持つ意味に着目し描写の必要から用いた、というものである。

(19) 又过火类坳，坳下下望，见坳上有一具枯骨，长四十余里。（第六）

(20) 良久，一时三五道火裂，深沙衮衮，雷声喊喊，遥望一道金桥，两边银线，尽是深沙神，身长三丈，将两手托定。

(19)は量詞“具”によって“枯骨”が一体分であることが分かり、　(20)では“道”によって“金桥”が長く伸びているイメージが浮かび上がる。

また量詞によって具体的な形、量が明示されることは、対象に実体感を与え、現実的な事柄として提示しようとすることにもつながる。2.2.2 で挙げたように変化を表す場合、量詞が付加されることによって名詞の示すモノが実体感をもって示され、結果として表現

---

[7] 対象が初出であれば、際立ち或いは関心の程度は高くなり、既出であれば相対的に低くなるが、次の量詞の有無もそうした観点から見ることができる。
・我师看此是九条馗头鼍龙，常会作孽，损人性命。（第七）
・九龙咸伏，被抽背脊筋了。（第七）

効果をあげているといえる。

さらにこうした三次元的な際立ちはまた、文脈あるいは談話での際立ちという一面も持ちうる。2.2.3 では、量詞の付加が話し手・書き手の関心の程度にかかわっているという仮説を提示したが、関心の高いもの、あるいは目立つように伝えようとするものを言語的にマークしようとするなら三次元的際立ちを示す量詞を用いることは一つの有効な方法である。この方法はしかし、『大唐三蔵取経詩話』においては試行的に、つまり語用論のレベルで用いられたものであり、方法と効果（意味）が固定的に、つまり統語的に対応したものではなかった。量詞の有無を統一的に解釈できないのは、形式と意味が一般化していない、すなわちルール化していないというまさにこうした段階にあったからだと考えられる。一般化していないとはいえ、これら新しい形式への移行期に見られた現象は、確かに現代の用法につながるものといえよう[8]。

3　『老乞大』『朴通事』の用例から

3．1　『老乞大』『朴通事』のテキストと数量表現について

『老乞大』『朴通事』は朝鮮半島において用いられた中国語の教科書で、ともに主として会話形式で書かれている。前者は朝鮮の商人が中国の大都（北京）に交易に出かけた一部始終を、後者は歳時、娯楽、風俗など中国の生活文化一般を扱っている。その成立は、両者とも元代 1423～1434 年の間とされているが、現在確認されているのは『老乞大』のみで、『朴通事』のほうは未だ発見されていない。明初、1480～1483 年ごろに改訂され、その韓国語の翻訳本が 16 世紀初（1515 年ごろ）に『翻訳老乞大』『翻訳朴通事』として、また 1670 年に『老乞大諺解』、1677 年に『朴通事諺解』として刊行された。清代に入り、1761 年および 1795 年に再び改訂版が出版され、それぞれ『老乞大新釈』/『朴通事新釈』、『重刊老乞大』として残されている[9]。

『老乞大』が元代の白話を研究するにおいて貴重な文献であることはいうまでもない。加えて、明代、清代に当時の言語に合うよう改訂版が出され、結果として元・明・清の三代にわたる北方言語の変化を観察できることは、さらに『老乞大』『朴通事』の中国語史における学術的意義を高めている。本稿の考察対象である量詞の用法についても、この三代において明らかに変化が見られる。以下では、まず、元代の量詞の用法としてみた場合にどのような特徴があるのかを挙げ、次に元・明・清三代においてどのような変化があったのかを見ていく。『老乞大』については、(a)『（旧本）老乞大』(b)『老乞大諺解』(c)

---

[8] 吴福祥 2004（pp. 85－88）は、『朱子语类缉略』における“个”について、その出現回数は 535 回、そのうち、具体的なものに用いられているのは 142 回、抽象的な事物、動作や性状に用いられているのは 393 回という数値を挙げている。このうち抽象的な事物は、現実世界に実体を持たないが、量詞が文脈・談話レベルでの機能を持っていたと考えれば、“个”が多用されていることは不思議ではない。

[9] 太田 1988、李泰洙 2003、竹越 2007、2006 等参照。

『老乞大新釈』(d)『重刊老乞大』の4種類のテキストで、『朴通事』は(B)『朴通事諺解』(C)『朴通事新釈』の2種類のテキストから考察する。

3．2　[数詞＋名詞]の減少と[“个”+名詞]の増加

『大唐三蔵取経詩話』では、上述したように量詞を伴わず数詞が直接名詞に隣接する形式が量詞を伴うものと同様に出現し、離散的事物を数える場合ににについていえば、むしろやや優勢であった。こうした比率は『大唐三蔵取経詩話』に限ったことではなく、武丹2005の調査によれば量詞を伴うものと伴わないものの割合が逆転するのは、元代から明代にかけてである[10]。ただ武丹2005の調査では量詞の中に集合量詞も含まれているため、離散的事物を数える場合だけを見れば、遅くとも元代には量詞を伴う形式のほうが優勢であったと考えられる。例えば『老乞大』において、純粋に離散的事物を数えるもので量詞を伴わない形式は、ことわざの中で用いられている“一客不犯二主”が挙げられるのみで、完全に量詞を伴う形式が主流となっている。

このように量詞を伴う形式が主流となっている中で、[数詞＋名詞]に代わって目に留まるのが、[“个”+名詞]という形式である。

(21) 前头不远，有个草店儿。

(22) 看家的有那没？有个后生来，这里不见也，敢出去了。

この形式は、数詞“一”が省略されたと見るのが一般的である[11]。『老乞大』においても、同様な文脈で“一”が現れている用例や、後のテキストでは“个”の部分が“一个”になっている例があることを考えると、やはり“一”の省略という見方が支持される。

(23) 新近这里有一个人家，只为教几个客人宿来，那客人去了的后头，事发，……(后略)

(24) 咱们往前行的十里来田地里，有个店子，名唤瓦店，咱每到时，或早或晚则那里宿去。(a)

(24)’咱们今夜那里去住呢。咱们往前走。十多里路，有一个店，名叫做瓦店，咱们到那里。(c)

ただ、この省略というのは、先秦時代に用いられていた“匹马”“束丝”の量詞が“一”を内包していたために“一”を省略したのと同じであるという[12]。日本語でいえば「寸分

[10] 武丹2005の挙げる数値は以下のとおりである。

	不带单位词/个体量词的数量结构	带单位词/个体量词的数量结构
先秦	10	1
汉代	9	1
魏晋南北朝	10	1
唐代	4	1
宋代	3	1
元代	2	1
明代	1	5
清代	1	7

[11] 王绍新1989、吕叔湘1944等参照。

[12] 王绍新1989、p110参照。

も違わず」というときの「寸分」が一寸一分の意味であるのに相当しよう。

では、[“个”+名詞]もまた、現実世界あるいは談話での際立ちという性格を持っているのだろうか？

(25) 俺是客人，今日晚也，恁房子里觅个宿处。

我房子窄没处安下。你别处寻宿处去。

(26) 兀那店子便是瓦店。寻个好乾净店里下去来，歇住头口者。

(27) 按拣个好日头回去。

(28) 俺那里男子汉不打水，则是妇人打水，著个铜盔，头上顶水。

(25)の例では、客側から提示された“宿处”はこの一文で重要な情報となっているが、家の主が答える際に、“宿处”は旧情報となり“个”が付加されていない、という説明が可能である。しかし実際のところ、[“个”+名詞]は (26)～ (28)のような連動文あるいは複文の VP1（前件）に現われることが少なくない。その統語的位置から考えると、必ずしも“个”が名詞の指す事物を際立たせているとは主張できない。

実は、こうした用法は早くも唐代に見られ、王绍新 1989 はその機能を“表不定（不定であることを表す）”としている。また王绍新 1989 は、“一”が省略されるという状況下で“个”を専用量詞を持つ事物に付加することができたとし、“个”の量詞性が弱まり冠詞的な成分になっていると指摘している。

これらのことから、“个”は、離散的事物を数える個体量詞であることに加え、単独で名詞に付加し不定を表す機能を持つようになったことがうかがえる。不定を表す機能の本質は、いわゆる個体化機能であり、量詞を付加することで、実体を持って現実世界に存在するものに照応するのである[13]。この機能こそが、日本語の助数詞との相違であり、現代での量詞の頻度を高めているが、唐代に“肇端”（王绍新 1989、p114）があり、徐々に広がっていったと思われる。このことは『老乞大』『朴通事』の数種類のテキストの異同にからもうかがうことができ、時代が下るにつれ“个”や専用量詞の出現頻度が高くなっている。次にこうした量詞使用の辻的変化について考察する。

3．3 “个”の付加

まず、離散的事物に付加する“个”であるが、上述したように『（旧本）老乞大』（以下(a)と記す)で既に現れているので、その後のテキストにおいてもやはり付加されている。ただ、固有名詞の場合については、(a)と『老乞大諺解』（以下(b)と記す）は、“个”が付加されていないが、『老乞大新釈』（以下(c)）『重刊老乞大』（以下(d)）では付加されている。

(29) a. 这里有五虎先生，最算的好有，咱每那里算去来。

[13] こうした個体化機能が広まることで、日本語のように可算的でも不可算的でもあった中国語の名詞は、不可算名詞であることがデフォルトとなっていく。

b. 这里有五虎先生，最算的好。咱们那里算去来。

c. 这里有个五虎先生，最是算的好。咱们就到那里算卦。

d. 这里有个五虎先生，看命最好。咱们到那里问问。

人名に“个”が付加されているものもまた、唐代の文献に既に見えるが、未だ一般的ではなかったということであろうか。しかし、一般に“这里有个好先生，…”という言い方がなされていたなら、名前がついた場合に“个”が付加されることはその拡張的な用法にすぎない。一方で唯一無二の実体的な存在に【現実世界にある実体】というマークをわざわざ付加することの矛盾が、“(一)个”を付加するか否かでせめぎあっていたことは十分に考えられることである。

さて注目されるのは、一般名詞ではあるが、その文脈での働きは、動詞と結びついて抽象的な概念を表している場合である。(a)(b)では“个”が付加されていないが、(c)(d)では付加されている。

(30) a. 既你投大都去时，俺是高丽人，汉儿田地里不惯行，你把似拖带俺作伴当去不好那？

b. 你既往北京去时，我是高丽人，汉儿田地里不惯行，你好歹拖带我作伙伴去。

c. 你既往北京去，我是朝鲜人，中国地面素来行不惯，你好歹带我作个同伴去。（＝d）

(31) a. 问先生道：与俺看命。

b. 问先生：你与我看命。

c. 先生，你与我看个命。（＝d）

(30)の“伴当/伙伴/同伴”は、実体を持つ「仲間、連れ」ではなく、身分、立場としてのそれである。 (31)の“命”は「運命」であるが、ここで出立の日を占ってもらうという場面で、より抽象的な意味で用いられている。このような用法について吕叔湘 1944 は、“表面上(一)个是属于一个名词，但是实际上它的作用在于表示动量”(p155)としている。言い換えれば、３．２であげたような不定冠詞的用法が、モノの個体化＝現実世界に照応するものを持つものとして働いているなら、 (30) (31)のような用法はコトの個体化として働いているということである。モノを現実の世界(空間)で実体としてとらえるなら、コトもまた現実の時間に生起する事件、事象としてとらえられる。モノの個体化は、元代以前から用いられていたようであるが、モノに準じて、コトも抽象世界と現実世界とで異なる表現を用いるようになり、それが清代のテキストに反映されていると見られる。

３．４　専用量詞の付加

元・明代には用いられず清代に用いられるようになったのは“个”ばかりではない。専用量詞もまた、明代のテキストでは無かったものが清代のテキストでは現れている。

(32) B. 这几日我家里有人去，先生你写与我书稍的去。

C. 这几日我家里有人回去，先生你与我写一封书稍去何如。

(33) B. 一个小鬼拿着大红罗伞，马前马后跟着的大小鬼卒，不知其数，前面一个鬼，拿着三丈来高的大旗号上写着明现真君。

C. 一个小鬼撑着红罗伞在马前，后边跟着大小鬼卒。又有一个鬼，拿着三丈高的一面大旗，上写着明现真君四个大字。

“个”の場合と異なり数詞“一”もが付加されているのは、“个”以外の量詞が“一”という概念を内包せず量詞としての文法化が進んでいたからにほかならない。これらは、名詞に対する専用量詞であるから、モノについていうものであることはいうまでもない。また、コトについての専用量詞である動量詞が付加されるようになった例も見られる。

(34) a. 已赢了也。输了的做宴席者。

b. 我赢了。输了的做筵席着。

c. 我赢了。你输了，就罚一遭儿筵席，请我们。（＝d）

(35) B. 姐姐来，咱们下蟹碁

C. 姐姐來，咱们下一盘蟹碁吧。

(34)については、動詞が“做”と“罚”という相違はあるが、“做”であっても“遭儿”という動量詞と共起することができるので、例としてあげたい。 (35)で“蟹碁”は実体を持つものとしてではなく、抽象概念として用いられているので、“盘”は、名量詞としてではなく動量詞として働いていると見るべきであろう。

これらの現象について考える前に、もう一つの現象について見てみたい。それは、元・明代のテキストでは“个”が用いられていたものが、専用量詞に置き換えられていることである。

(36) a. 到晚师傅行撤签背念书。背过的，师傅与免帖一个。

b. 到晚师傅前撤签背念书。背过的，师傅与免帖一个。

c. 到晚晌师傅前面撤签背书。背的熟的，师傅给免帖一张。（＝d）

(37) a. 主人家，别处快镘刀借一个去。

b. 主人家，别处快铡刀借一个来。

c. 主人家，你可往别处借一把快铡刀来。（＝d）

(38) B. 为头儿门外前放一个桌儿，上头放坐一尊佛像。

C. 大门外放一张桌子，上面供着一尊佛像。

“免帖”は“张”に、“铡刀”は“把”に、“桌儿/桌子”は“张”に“个”から置き換えられている。コトの場合もわずかに一例であるが置き換えられているものがある。

(39)a. 到那里，教那弹弦子的谎厮每捉弄著，假意儿叫几个“舍人公子”，早开手使钱也。

b. 到那里，教那弹弦子的谎厮们捉弄着，假意儿叫几声“舍人公子”，早开手使钱也。

c. 到那里，教那弹弦子的谎精们捉弄着，假意儿叫几声“舍人公子”，便开手赏赐罷。（=d）

さて、それまで用いられなかったところに量詞が用いられるようになり、また“个”を用いていたところは専用量詞で置き換えられるという現象はどのように解釈できるであろうか？

まず考えられるのは、専用量詞の選択が一般的になったということである。どの名詞にどんな量詞を用いるかは“约定俗成”の側面があり、時代によってまた地域によって相違がある。まして全体的に使用頻度が低ければ、少なくとも現代ほどには量詞の選択は一般化されていなかったし、それは裏返せば量詞の原義が現代より意識して用いられていたということである[14]。そのため、文法的あるいは談話的に量詞を必要とするところでは、敢えて専用量詞は選択されず汎用量詞“个”が用いられていた。それが、時代が下るにつれ、語り物や戯曲などが大量に現れたことも相俟って専用量詞も一般的になり、次第に選択される機会が増えたのではないだろうか。

次に、専用量詞が“个”に取って代わったということは、両者が同等の機能を担うようになったことを示している。上述したように、“个”は本来、個体量詞の一つという一面と不定を表す冠詞的用法を持つという一面があった。同じく個体量詞である専用量詞が“个”と同様に冠詞的用法、すなわち個体化機能を持つようになったことは、名詞が不可算名詞的なふるまいをする以上、むしろ当然ともいえよう[15]。また、個体化機能はコトについても適用するので動量しもまた単に動作の回数を表すばかりではなく、現実世界の時間軸上に照応する機能を持ったということがいえよう。

4　おわりに

以上、『大唐三蔵取経詩話』と『老乞大』『朴通事』の用例から数量表現と量詞用法の変遷について見てきた。用例が十分ではないので、さらに他の文献に当たり検証しなくてはならないが、およそ次のような流れを見ることができた。

①『大唐三蔵取経詩話』では、数量表現に量詞を伴うものと伴わないものとがともに用いられたが、事物を際立たせて表現したい場合は、量詞を伴う形式が用いられた。

②量詞を伴わない表現は、元代に成立した『老乞大』では特殊な表現となり、代わっ

---

[14] 叶桂郴 2008（p156）は、次のように記述している。
“经过宋元的变化，明代量词正处于一个融合的时期，表现为同一个量词的名词对象群和统一名词的量词选择群比现代汉语要多，即‘一量多名’和‘一名多量’现象很多。”

[15] 王绍新 1989 は、唐代の用例では抽象的な名詞と“个”が結びつく時はおよそ“一”が省略されていたが、近現代では“一”を省略しないものがあることについて、次のような記述をしている。
可否假设是在“个”与非名词连用的事实已被普遍接受并形成习惯后，才重又补加数词的。(p119)
本稿での仮説は、まさに王绍新 1989 の直感に符合するものである。

て数詞を伴わない[“个”+名詞]という形式が見られた。

③[“个”+名詞]における“个”は、不定を表す冠詞的機能＝個体化機能を担っていたが時代が下るにつれ、専用量詞もまた個体化機能を担うようになった。

④個体化機能は、モノに対してだけではなくコトに対しても当てはまり、“个”の持つ動量詞的用法から一般の動量詞も個体化機能を持つようになった。

冒頭で、量詞の文法化を考えるにあたってどのようなパラメーターを設定するべきかという問題提起をしたが、以上の考察で見たように現代の量詞に至る文法化であるなら、吴福祥 2007 が挙げるものに加え、「個体化機能」もまた検討されていいはずである。

さて、個体化のマークとしての特異性、あるいは独自性を失った“个”であるが、その後も淘汰されることなく、現代語でも最も使用頻度の高い量詞である。これは、“个”がなお他の量詞とは異なる存在意義を持っているからであろう。すなわち名量詞としても動量詞としても機能しうるという汎用性の故であるが、この点については稿を改めて考察する。

【 参考文献 】

贝罗贝 1998 〈上古、中古汉语量词的历史发展〉《语言学论丛》第二十一辑，99-122

大河内康憲 1985 量詞の個体化機能,《中国語学》232 号, 日本中国語学会, 1 -13

古川 裕 1997 数量詞限定名詞句の認知文法——認知物の＜顕著性＞と名詞句の＜有標性＞——,『大河内康憲教授退官記念 中国語学論文集』東方書店, 237-265

李时人・蔡镜浩 1997 《大唐三藏取经诗话校注》，中华书局

李 泰洙 2003 《〈老乞大〉四种版本语言研究》，语文出版社

吕 叔湘 1944 〈个字的应用范围, 附论单位词前一字的脱落〉，《汉语语法论文集》增订本，商务印书馆 1984

石毓智・李讷 2001 《汉语语法化的历程——形态句法发展的动因和机制》，北京大学出版社

太田 辰夫 1958 『中国語歴史文法』江南書院

1988 『中国語史通考』白帝社

王 力 1989 《汉语语法史》商务印书馆

王 绍新 1989 〈量词“个”在唐代前后的发展〉，语言教学与研究第 2 期，98-119

汪 维辉 编 《朝鲜时代汉语教科书丛刊》，中华书局

武 丹 2005 〈汉语数量结构语序演变的历史考察〉，中国社会科学院研究生院语言系硕士学位论文

吴　福祥　2007　〈魏晋南北朝时期汉语名量词范畴的语法化程度〉，语法化与语法研究（三），246-268

吴　福祥　2004　《〈朱子语类辑略〉语法研究》，河南大学出版社

向　熹　1993　《简明汉语史》高等教育出版社

叶　桂郴　2008　《明代汉语量词研究》岳麓书社

于　涛　2004　《老乞大》和《朴通事》的名量词研究，云南师范大学学报第 2 卷第 6 期，25-27

周　晓林　2007　《近代汉语语法现象考察——以〈老乞大〉〈朴通事〉为中心》，学林出版社

竹越　孝　2007　「『老乞大』概説」　古代文字資料館「いろいろな概説」
http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/pdf/laoqida.pdf

竹越　孝　2006　「『朴通事』概説」　古代文字資料館「いろいろな概説」
http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/pdf/bokutsuji.pdf